

限りない可能性に期待して

藤村貞子

「先生！お話することあるよ」
「ほくも、あるよ」

月曜日の朝の一年生の教室。こんな会話があちこちからはずむ。日曜日の話を早く聞いて欲しい声である。

六月二十三日 国語の時間。

今日のめあては、(一)どこで (二)だれと (三)何をしたか、の話し方。

めあてを大きく板書する。おまけとして、●どんなだったか。ここには赤丸を付ける。おまけはむりにしなくいい。できたらお話すること、と前々からの約束である。

「ぼくは昨日ひよこと遊んだの」
「台所に飛んできたわがたを捕まえたよ」

このころになると、しりごみをする子も友達のままねをする子もほとんどなくなり、話題は多種多様に広がって楽しい。

「ひよことどこで遊んだのかな」
と、(一)項目の脱落に気づいて追求する子。そろそろこの子たちの耳も、心して働くようになって頼もしい。

今日のわたしの仕事は、一人一人の語形の吟味と補正。ようやく人前でもおくせず話せるまでになった子供たち

の心を、教師の不注意な言葉でしばませることのないよう配慮して、表現の重複とめあての三項目の脱落がないように助言する。その子なりのよさを認めて賞賛、激励することが次の意欲に結びつくことは確かである。

語形を直すことに加えて、でき得る子には、事柄の様子を少し掘り広げること今日あたりからの予定。

「ひよこはどんなふうにしてえさを食べたの」

「くわがたを何で捕まえたのかな」と、視点を当てそのときのことを思い出させる。

「くちばしでえさをつついて食べたの。えさはね、米粒みたいのだよ。食べたあとで地面にくちばしを何回もこすりつけてた」

「くわがたは、お父さんがうちわでバタバタたたいてやとつかまえた。足に糸をつけて、ぼくの机の足にしばっておきました」

既に順序よくまとまったお話のできる子には、確かな認識の上に立つ個性的なとらえ方、創造的なとらえ方をさせて、ものをよく見る目と、それを正しく表現させる力を養っていききたい。

それが作文指導のための伏線でもある。

入学してきた四月の初めから、触れ合いを大切にしたい気持ちと、子供たちを取り巻く環境を知りたくて試みている休日明けの「昨日のこと」の話し合いであった。

これで何度目になるのだろう。

「昨日は何をしていたの」
の問いにも「自転車乗り」とか「ままごと」とか断片的な言葉だけがかえってきた初期のころに比べて、

「今日は、ぼくからお話させてね」と、催促してくるこのごろである。

作文を書くことも、文字をうろ覚えのところから一向に苦にしない様子。とつとながら考え考え鉛筆を走らせている姿……。おもしろいことがあった、先生に知らせてやる、といった調子なのだろうか。

じょうず、へたは大いにある。読みにくいことも事実。

でも子供たちの生活がそこにあり、生の声がそこから聞こえてくる。

表現のおもしろさに、その子の姿が浮かぶ書き表し方に、思わず共感を抱きながら小さな丸を幾つも幾つもつけてやると、一生懸命数えている一年生。

今年もまた「とじ込み文集」を作っている。毎回、毎回の作品を日付を書き入れて積み重ねていく個人ごとの文集。この一年間を……来年もつづり続け、また、お別れの文は喜んで返してやることになるのだろうか。

明日もまた、精いっぱい気持ちで聞かせてくれる「昨日のこと」の話を待つ。

(いわき市立四倉小学校教諭)

教育随想

ふれあい

